学校だより

9月 かわい

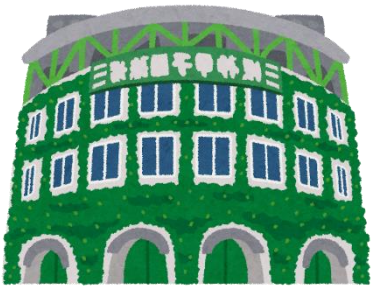
令和４年８月２９日

http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawai/

「最適な学び」を求めて

校長　窪田　剛久

この夏は、例年にない早い梅雨明けから始まった連日の猛暑、そして各地を襲った記録的な大雨など、自然が猛威を振るいました。また新型コロナウイルス感染症の流行が続く中、行動制限のない夏休みとなり、全国で過去最多の感染者数が報告されています。自然に太刀打ちできない人間の小ささを痛感します。そうした人間自身も他国では争い、多くの犠牲者を自らの手で生んでしまっています。その影響によってか物価が不気味に上昇し、エネルギー問題も相まって、人類の歴史がまるで詰将棋のように少しずつ厳しい局面に向かっているように感じます。私達大人が、子ども達の未来のために、今まさに次の一手を打たなければならない状況になってきています。



そうしたかつてない情勢の中、３年ぶりに一般客を迎え開幕した全国高校野球選手権大会が、決勝戦を終えました。東北勢として悲願の初優勝となった仙台育英高校の須江航監督が優勝インタビューで以下のように語りました。

「入学どころか、多分恐らく中学校の卒業式もちゃんとできなくて。高校生活っていうのは、僕達大人が過ごしてきた高校生活とは全く違うんです。青春って、すごく密なので。でもそういうことは全部ダメだ、ダメだと言われて。活動してても、どこかでストップがかかって、どこかでいつも止まってしまうような苦しい中で。でも本当にあきらめないでやってくれたこと、でもそれをさせてくれたのは僕達だけじゃなくて、全国の高校生のみんなが本当にやってくれて。例えば、今日の下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとか、そういう目標になるチームがあったから、どんなときでも、あきらめないで暗い中でも走っていけたので。本当に、全ての高校生の努力の賜物が、ただただ最後、僕達がここに立ったというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手してもらえたらなと思います。」

３．１１をはじめ、今夏の風水害など数々の苦難にさらされてきた東北の方々にとって、今回の優勝は何よりも嬉しく、大きな勇気を与えたのではないでしょうか。私も監督の言葉に、同じ教育関係者として深い感銘を受けました。須江監督は言いました。「本当に、すべての高校生の努力の賜物」と。私達が今まで当たり前に享受してきた生活が、今の子ども達にとっては大変貴重なものになっています。そうした逆境のなか、素晴らしいパフォーマンスを見せてくれた高校球児の皆さんは本当に輝いていました。私達大人もあきらめずに前を向き、努力を重ねなければなりません。

この夏「教育課程推進協議会」の中で、今は「個に応じた指導」から「個別最適な学び」にシフトする教育の転換期にあるとの言葉を聞きました。「個に応じた指導」は指導者の視点であり、これからは学習者の視点に立った「個別最適な学び」を実現させていくときであるということです。教育界の次の一手がここにあります。また新学習指導要領では「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力」の育成を掲げています。まさに未知の状況に直面している私達にとって必要な力であり、その中で未来を切り開く能力を育成することが重要とうたわれているのです。今夏の高校球児達の活躍は、未知の状況にひるまず対応し、大会の未来を主体的に切り開いた成果だったのではないでしょうか。その背景には子ども達の主体性を尊重し、「最適な学び」を模索した監督達の姿があったことは、容易に想像できます。今回準優勝となった下関国際高校の坂原秀尚監督は、部員１名だった野球部を１７年間で準優勝まで導きました。指導は厳しかったそうですが、辞めていく部員には朝迎えにいって引き留め、「３年間やることの大切さを感じてほしい」という熱い思いで猛吹雪の中、一緒にランニングに付き合ったそうです。子どもの「個」を見極めた「最適な学び」がそこにはあったのではないでしょうか。

夏休みが終わりました。ひと夏を経て成長した子ども達の「個」に寄り添い、「最適な学び」を実現できるように、職員一同今後も工夫と努力を重ね、子ども達の主体性を引き出していきたいと思います。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。